



狼の子ども

山下俊郎

子どもの心の成長には、いろいろの条件が関係している。このいろいろの条件の持っている大切な意味をはっきりとつかむということは、子どもを育てるものにとって何よりも大切なことである。そして、ある一つの条件が生物の成長に対してどういう意味を持っているかということをはっきりとつきとめるためには、実験をやってみるのが一番たしかな方法である。動物や植物の場合には、こういうた実験が実際に行われている。たとえば、ねずみにビタミンB₁をやらさないでおけばどういうことになるかという実験が行われると、ビタミンB₁の持つ意義ははっきりわかる。植物の成長に日光が大切な役目をしていることは、日光をあてないでおけばもやしが出てしまうことでわかるし、日光が葉緑素を作るはたらきを持っていることがわかる。

ところが人間の場合、ふつうの条件のもとではこういった実験が中々できない。人間の子どもである以上、その子の最善の成長を阻害するような条件を、わざわざ人為的に作って、子どもをいためることはとうていできないからである。そこで、人間の場合には、何か異常な条件が自然に起った場合について、その条件の持っている意味をたしかめるというのがわたくし達のふつう採っている方法である。いわばたくまない一つの実験といっている。自然の実験としては、たとえばきょうだいのいない一人子についていろいろ研究して見ると、そこに一人子に特有の傾向があって、それがきょうだいがいないために起ってきたと見ることができれば、いわば裏側からきょうだいの意義というものができるというようにことが考えられる。

子どもはいうまでもなく人間的文化的環境の中に生まれ、そしてその中で育つ。ところがふつうの子どもの場合には、その人間的文化的環境というものの持つ意義が、それほどはっきり浮びあがって来ない。しかし、人間的文化的環境は、子どもの成長に対して本質的に重要な意味を持っているのである。このことは、たまたま人間的文化的環境でない所で育つた子どもというものが、もしこの世の中にあるとすれば、その子どもを見ればはっきりとつかめるであろう。

このような問題に答えてくれるのが、「狼に育てられた子ども」である。時代はだいぶ古いが、一九二〇年インドで、狼の穴から推定年令八才と一才半と思われる二人の女の子が発見され、シング神父という牧師の手で育てられた。大きい方がカマラと名づけられ、小さい方がアマラと名づけられ、この牧師の経営する養護施設で育てられた。アマラはこの施設に引きとられて一年で死んだが、カマラは七年あまり生活してから死んだ。そしてこの養育の記録が、アメリカの心理学者ツイング教授およびゲゼル教授の註釈をつけられてそれぞれ出版されている。恐らく生後間もない頃に、土民の迷信によって育てられた子どもが狼によって育てられたのであろうが、この「狼の子どもの成長に関する問題は、ひじょうに大切な問題を含んでいる。(ゲゼル博士の書物は近く宮城音弥氏の訳で出版される由である)

この狼の子達の成育記録の中には、あまりにも大きな問題が

たくさん含まれているので、この小文ではとも全部を論ずることはできないが、まずいい得ることは、立派に人間としての素質を持った子どもが、狼に育てられると全く狼的生活をするようになるということである。この子達は、人間としての直立の姿勢で歩くことができない、また物を食べるのに、犬や猫つまり獣類と同じに口を皿につけて食べる、暗い所が好きで日中はうずくまっている、狼のような叫び声を発する、というような調子である。そして、二人とも次第に人間的環境の中で生活するにしたがって、きわめて徐々にではあるが、人間的生活中に近づいて行った。このことは、人間としての素質は、人間的文化的環境の中でのみ発展し、成長するものであることを教えるものである。

そして、この二人の言語の覚え方を見ると次のことがわかる。アマラは牧師の所へきてから二カ月で、水という意味の "Water" という言葉をいつている。カマラの方は、来てから四年たつてようやく同じ言葉をいつている。つまり、生まれてから狼の中で生活した時期が短いほどそれだけ早く人間社会へ復帰できるわけである。そして、小さいうちに人間の社会に帰った方が早く人間として成長するのである。このことは幼児教育の重要性を証明する一つの「自然的実験」である。